



岡田理子 「秋の実り」 F10 (水彩)

作者コメント：

ピーコックブルーとピンクの2色で描きました。レトロで秋らしい感じが出れば良いと思いました。花瓶やかぼちゃの重量感が感じられるように描きました。

喜田コメント：

絵として少ない色数で描いた魅力があります。強くてとても素晴らしい絵だと思います。また、岡田さんは画面の汚し方がとても上手になったと思います。画面を「美しく汚す」ということは、画家にとって大切な技術なのです。これは上手になりました。ピーコックブルーとピンクを混ぜれば薄いエンジのような魅力的な色が出るのですね。卓上に混然と置かれたのものが、お互いにつながって一つのバランスを形成して、安定を生んでいます。不思議な魅力ある作品です。しかし、タイトルの「実りの秋」はこの絵からは感じられません。かぼちゃやナスの野菜の存在を壺や花瓶や水差しが強すぎて殺してしまいました。2色の絵具（ピーコックブルーとピンク）を使って描くには、秋の野菜は難しすぎます



竹前義博 「黄花コスモス」 F6 (水彩)

作者コメント：

妻の丹精込めたコスモスです。数年前から、ドライブの途中に見かけたコスモスを採取し、家の周りに植えました。家の周りはコスモスでいっぱいです。人工物がないので、遠近感を出すのに悩みました。

喜田コメント：

なんて気持ちの良い愛らしい作品なのでしょう。オレンジ色の「黄花コスモス」の花と働く農夫の姿がとてもマッチしています。

秋が近い空には秋の白雲が流れて、まるで静かなワルツを聴いているような気持ちになります。山の表現も感じたまま絵を描いていて、好感が持てます。構図も上下のバランスが取れていて破綻がありません。

竹前さんはどんどん上達していますが、色の使い方がまだ生っぽいところがあります。これからは、もう少し色々な色を混ぜて、竹前さんの「色」を作る冒険をしてください。



武智康子 「秋の胡蝶蘭」 F4 (水彩)

作者コメント：

たまたま花屋で見つけた胡蝶蘭の切り枝を求め、それだけでは淋しいので、ベランダの鉢植えのアイリスの葉 4 枚を添えて花瓶にさして描いた。ただ、葉の一枚を敢えて折って花瓶に差してみた。

構図的には、少し落ち着いたように感じたが、胡蝶蘭は描くのが難しかった。ブルーやグレー、黄色などの色を混ぜて花びらに色を薄くかけてみたが、もっと色をかけるべきかなとも思った。バックは秋色にして花を抜いてみた。

喜田コメント：胡蝶蘭を日本画に描いた作品を観たことがありますが、水彩や油彩で描いたのは珍しいです。それほどに胡蝶蘭は難しい題材だと思います。大いなる挑戦をしたのですね？アイリスの葉を 4 枚添えて、構図的な面白さを作ったことは成功です。斜めに伸びた緑色の葉の形が作品に変化を与え救われました。背景の黄色が目立ちすぎて、肝心の胡蝶蘭の存在が生きていません。胡蝶蘭を画面からはみ出るくらいに大きく描き、背景を暗くして胡蝶蘭の花の白さ浮き立たせたらどうですか？



黒田重雄 「紅葉の白樺林」 F6 (水彩)

作者コメント：

新潟県の豪雪で有名な秋山郷での秋の一風景です。紅葉の真ただ中、白樺の幹の白とそれを彩る赤や黄色の葉の対比に惹かれました。幹の白さと葉の色との重なりをマスキングして境界のコントラストを強調してみました。

喜田コメント：

黒田さんの感動が伝わってきますね。赤や緑、金糸・銀糸が織りなす美しい紅葉を見事に描いています。錦おりなす色模様を意識して横方向に流れるように描いています。これに対して白樺の白い幹が垂直要素を作り、横・縦のバランスが計算通りに達成されたと思います。点描的に一筆一筆気持ちを込めて、全体のバランスを失わないように描くことは、経験や技術が必要です。また本当に根気のいる仕事だと思います。見事にバランスを損ねずに描いたと思い、感心しました。とても良い作品です。



月川りき江 「ほおずき」 20cm x 18cm (新聞ちぎり絵)

作者コメント：

昔々、浅草の ほおずき市 を見た時、九州にはない風景で驚きました。
最近、近くの花家さんに数本、枯れたのと一緒にぶらさがっていましたので。

喜田コメント：

美しい作品です。構図も安定していて、とても良い。1枚1枚の葉っぱはすべて色が違っていることに驚かされる。ほおずきの赤い皮の表現も面白い。葉っぱの真ん中に、敢えてハサミを使って作ったシャープな葉脈を入れて、作品に勢いを付けた。
上の方の葉っぱの中に「うまいもの」という新聞ちぎり絵ならではの、「活字」を入れたのは作者の遊び心だろう。修正ポイントはない。



遠矢慶子 「百花繚乱」 F6 (水彩とパステル)

作者コメント：

画材が多すぎて、乱雑になりました。動きは出て楽しい絵になりました。
年々絵が雑になり、これも年のせいでしょうか。

喜田コメント：柔らかくてパステル特有の優しさがあって美しい作品です。水彩には「ぼかし」「にじみ」という技法があり、これが水彩画の大きな魅力だが、この作品はパステルの「ぼかし」が美しい。指先でこすって調子を整えながら、ぼかす技法だ。

構図的には中心に花瓶があり、野の花や雑多な植物、赤い果実や赤い花が花瓶から四方八方に広がっている。この構図もとても面白いと思った。

緑の中に見える赤い「花」や「実」がこの作品に生命を吹き込んでいる。



井上清彦 「聖橋より西方を望む」 F4 (水彩・一部色鉛筆)

作者コメント：2か月ぶりの制作、鉛筆でデッサンをしっかり描き、あとは、色付けを感性に任せて描き上げた。

結構複雑な風景を選んだので、時間がかかった。少しラフな仕上げになってしまった。影や遠近感が出せたか気になる。風景画なので、立って描いた。

喜田コメント：

井上さんは病のために2か月間、絵筆を持たせませんでした。3か月ぶりの出品です。お茶の水の病院に通っておられますが、通院途中の「聖橋」の上からの風景です。井上さん独特の表現手法が健在なことが示されました。電車（中央線と総武線）の描きかたも面白いし、ビル群と電波塔も素晴らしく上手です。空のにじみも効果あり、右下に三角形に残した神田川の水もよかった。三角形がもう少し大きくても良かった



喜田祐三 「チャンギヴィレッジ」 F10 (油彩)

作者コメント：

最近、またシンガポール時代のスケッチを引っ張り出して、油彩で描いています。シンガポールでは1980年代に政府方針により、農業も漁業もなくなりました。この風景はかつて、シンガポールの漁師たちが生業を立てた漁港の跡です。40年たった今でも、なんだか漁港の匂いがして、私が好きなスケッチポイントの一つでした。チャンギ空港に近く、スケッチしている間、ひっきりなしに頭上を旅客機が飛んでいたことが思い出される。